

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 方便品 第二 <後半>』 (迹門・正宗分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得

たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例: (P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<方便品 (後半) のあらすじ>

【仏の悟りへと導くため、真理を三つに分けて説く『開三顕一』】—

『諸仏出世の一大事因縁』である《開示悟入》を説かれた世尊(釈尊)は、さらに言葉を強めて舍利弗(しゃりほつ)に説かれました。

【六七頁 二行】(『諸佛如来は但(ただ)菩薩を教化したもう～如来は但(ただ)一佛乘を以ての故に、衆生の爲に法を説きたもう。餘乘(よじょう)の若(も)しは二、若(も)しは三あることなし』) 「よいですか。仏

は、ただひたすらに『菩薩を教化する』ために法を説くのです。仏がこれまで様々な方法を用いて教えを説いてきたのは、ほかでもありません。衆生に『諸法実相』を知る《仏の智慧・仏知見》を悟らせるためであったのです。舍利弗よ、仏が法を説く目的はただ一つです。『全ての人を差別することなく平等に仏の境地(一仏乘)へ導く』ためです。この目的のために仏は法を説くのであ

って、その他の目的などありません。ですから仏の教えに、第二の教えや第三の教えなどというものはありません。仏が《声聞乘》《縁覚乘》《菩薩乘》の三つに教えを説き分けてきたのは、あくまでもただ一つの目的である『真理を示すため』であるのです

—【開三顕一】

【過去世の諸仏の『開三顯一』】——

【六七頁 五行】「しかもこうして『真理』を説き分けるのは私だけではありません。あらゆる国土（世界）の仏も / 『過去の諸佛も～』 《過去世の仏》も同じです。全ての仏は私と同様に様々な『方便』を用い、過去の実例や譬えを引用し、論理的に説明したりして、衆生のために教えを説くのです。 / 『是(こ)の法も皆(みな)一佛乗の爲の故(ゆえ)なり』 それというも、それはただ一つ、『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)にまで導く』という目的を達成するために行うのです」

【未来世の諸仏の『開三顯一』】——

【六七頁 終四行】『舍利弗、未来の諸佛の當(まさ)に世に出(い)でたもうべきも～』 「舍利弗よ。これから現われる《未来世の仏》も同様です。様々な『方便』を用い、過去の実例や譬えを引用し、そして論理的に説明したりして衆生のために教えを説きます。 / 『是(こ)の法も皆(みな)一佛乗の爲の故(ゆえ)なり』 これもやはり『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)にまで導く』というただ一つの目的を達成するために行うものです。そしてそれによって仏の教えを聞く者は、 / 『究竟(くきょう)して皆(みな)一切種智(いっさいしゅち)を得(う)べし』 最終的にはみんな『最高の智慧』を得るようになるのです」

【現世の諸仏の『開三顯一』】——

【六七頁 終行】『舍利弗、現在十方の無量百千萬億の佛土の中の諸佛世尊の～』 「舍利弗よ。現在あらゆる世界に存在する無数の《現世の仏》も同じです。現世の諸仏もまた、 / 『是(こ)の法も皆(みな)一佛乗の爲の故(ゆえ)なり』 『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)にまで導く』という、ただ一つの目的のために法を説くのです。そしてそれらの仏のもとで教えを聞く者は、 / 『究竟(くきょう)して皆(みな)一切種智(いっさいしゅち)を得(う)べし』 究極において皆、最高の智慧を得ることができるようになるのです」

【あらためて『開三顯一』を強調 《但(ただ)菩薩を教化したもう》】——

【六八頁 四行】『舍利弗、是(こ)の諸佛は但(ただ)菩薩を教化したもう』 「舍利弗よ。仏は『菩薩の道』を説き、全ての者たちに『菩提心を起こさしめる』ために法を説くのです。人々に仏の智慧を示し、悟らしめ、あらゆる人々を仏の智慧を成就する道へと導き入れるために行うものなのです」

【六八頁 七行】『諸(もろもろ)の衆生に種種(しゅじゅ)の欲・深心(じんしん)の所著(しょじゃく)あることを知(し)って』 「仏は衆生の様々な欲や、心の奥深くにしみつく貪欲の心を知っているために、一人ひとりに応じて巧みに『方便』を用いて法を説くのです。仏がなぜ、『方便』を駆使するのかは、『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)にまで導く』というただ一つの目的を達成する願いがあるからです」

【六八頁 終三行】『舍利弗、十方世界の中には尚(な)お二乗なし』 「舍利弗よ。この全宇宙で、究極の教えが二つ存在することなどあり得ません。ましてや三つあるはずもありません。 / 『諸佛は五濁(ごじよく)の惡世に出(い)でたもう』 諸仏は『五濁(ごじよく)の惡世』に仏は出現するのです。この《劫濁・こうじよく／マンネリ化》《煩惱濁・ぼんのうじよく／煩惱や我儘がより盛ん》《衆生濁・しゅじょうじよく／一人ひとりの

立場や性質が違うため、譲る心がなく「我・が」を一方向的に通す》《見濁・けんじよく／自己本位の見方で、一方向的に見る》《命濁・みょうじよく／全体のことや、後先・あとさきのことを考えず、目先の利益だけを求める》という乱れがはびこる悪世に生きる人々は / 《『衆生垢(く) 重く慳貪(けんどん) 嫉妬にして、諸(もろもろ) の不善根(ふぜんこん) を成就するが故に』》心の垢が大変深く重く、貪(むさぼ)り、物惜しみ、妬(ねた)みという悪心が自分の心を占領しているために、仏の教えを聞いても、到底、正しく理解するということができません。 / 《『諸佛、方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説きたもう』》仏はそうした者たちのために《一仏乗の教え》を、それぞれの機根に応じて説き分けるのです。まさに『方便力』をもって三つに分けて導くのです」

《劫濁・こうじよく》— 時代が長く、古くなったためにおこってくる悪。マンネリ化している状態。こういう時こそ仏の教えによって「人間の生きることの意味・使命」をもう一度見直さなければならぬ。

《煩惱濁・ぼんのうじよく》— 煩惱・我儘がますますさかんになるために起こる濁り。

《衆生濁・しゅじょうじよく》— 一人ひとりの立場、性質が違ふところから出る世の濁り。「譲る精神」が少なくなり、全体の調和を害する「我」「立場」を一方向的に通す。

《見濁・けんじよく》— ものの見方がそれぞれ違ふために起こる世の乱れ。邪見(じゃけん)・狭い自己本位の見方が横行して正見を蔽(おお)ってしまい、世が濁る。

《命濁・みょうじよく》— 人の寿命が短くなるためにおこる世の濁り。目の前の利益や目先の効果、すぐ効果のあらわれるようなことばかりを追い求める考えをする。

【『一仏乗』の教えを理解できない者は、仏弟子に非ず】—

【六九頁 二行】「もし私の弟子の中で『私は《阿羅漢・あらかん》である』。『私は《縁覚》である』などと言っても、 / 《『諸佛如來の但(ただ) 菩薩を教化したもう事(じ) を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非(あら)ず、阿羅漢(あらかん) に非ず、辟支仏(びやくしぶつ) に非ず』》『仏が法を説くのは「菩薩の道」を歩ませるために説くのだ』ということを理解しない者は、私の真の弟子ではありません。また本当の阿羅漢・縁覚でもありません。そして、『阿羅漢・縁覚』の境地にいて『仏の智慧を得る』ことを目指さない者は、 / 《『此の輩(ともがら) は皆(みな) 是(こ) れ増上慢(ぞうじょうまん) の人なり』》悟っていないものを悟っていると誤解するうぬぼれた人・増上慢(ぞうじょうまん) の人だと言うべきです」

【六九頁 終四行】「ただし私が入滅した後で、仏がいない時は別です。 / 《『佛の滅度の後(のち) に、～其(そ) の義を解(げ) せん者、是(こ) の人得難(えがた) ければなり。～餘佛(よぶつ) に遇(あ) わば、～便(すなわ) ち決了(けつりょう) することを得ん』》なぜなら仏がいないために、この教えを正しく受持し、理解することが大変難しいからです。しかしそのような人でも、もし他の仏に出会うことができれば、必ず究極の悟りを得ることが出来るようになります」

【六九頁 終行】《『舍利弗、汝等(なんだち) 當(まさ) に一心に信解(しんげ) し、佛語を受持すべし』》「舍利弗よ。私が今説いたことを心から信じ、胸に刻みなさい。 / 《『諸佛如來は言(みこと) 虚妄(こも) なし。餘乘(よじょう) あることなく唯(ただ) 一佛乗のみなり』》仏の言葉には偽(いつわり) はありません。仏の教えには、2 番目の教えや3 番目の教えなどというものはなく、ただ『一つの教え』しかないのです」

【先の『五千起去』した者たちについて言及】—

【(備) 七〇頁 一行】すると世尊(釈尊)は、以上の意味を『偈・け』を以って重ねて説かれました。
【(備) 七〇頁 三行】「先に五千起去した者たちは、まだ悟っていないのに悟ったと錯覚し、慢心が強く、自分のあやまちに気付かず、 / 『戒に於て缺漏(けつろ)有つて』 そのため戒律を守ることができていない者たちです。 / 『其(そ)の瑕疵(けし)を護(まも)り惜(おし)む』 その者たちは、自身の欠点を知っておきながら、そのことに向き合うこともなく妥協して、目先のことしか考えない その場しのぎの行動に終始し、易(やす)きにつく(自分の都合を何よりも最優先する) 身勝手な精神の持ち主でした。 / 『佛の威徳(いとく)の故(ゆえ)に去りぬ 斯(こ)の人は福德(ふく)少(すくな)くして 是(こ)の法を受くるに堪えず』 それゆえ、仏の境地があまりにも高いため、その教えに堪(た)えることができずに去って行ってしまったのです。この者たちは過去において積んだ徳が少ないために、この『最高の教え』を受け止める力が不足していたのです」

【(備) 七〇頁 七行】『此の衆は枝葉(しよう)なし 唯諸(ただ)もろもろの貞實(じょうじつ)のみあり』 「しかし、今、ここに残っている人たちは、最高の教えを受け入れる実力のある人たちで、本質を理解できる人たちです。仏弟子の要(かなめ)となる人。枝葉の人でなく“幹”の人たちです」

【これまで『小乗の教え』を説いてきた理由】—

【(備) 七〇頁 終行】『鈍根(どんこん)にして小法を樂(ねが)い 生死(しょうじ)に貪著(とんじゃく)し』 「機根が低く、目前の人生苦から逃れることを目的とした信仰だと、求める教えの程度は低いものとなります。その結果、人生の『変化』にとらわれることから逃れられず、仏の教えを聞いても、教えの真義を理解できず、“菩薩道”を正しく実践することができません。そのために相変わらず様々な苦悩に苛(さいな)まれてしまうのです。 / 『我是(われこ)の方便を設けて 佛慧(ぶつて)に入(い)ることを得せしむ』 ですから私は方便を用いて、まずは『現象にとらわれる心を捨てさせ、心の平安を得る』ように仮に導き、仏の『智慧の入り口』にまで導いてきたのでした」

【すべての人は仏になれる。『二乗作仏』】—

【(備) 七〇頁 三行】「私はこれまで / 『當(まさ)に佛道を成(じょう)ずることを得(う)べしと説かず』 『すべての人間は、必ず仏に成り得る』と説いてきませんでした。なぜ説かなかったのか。 / 『説時(せつじ)未(いま)だ至らざるが故(ゆえ)なり』 それは、まだ説くべき時期ではなかったからです。 / 『今正(いまま)しく是(こ)れ其(そ)の時なり 決定(けつじょう)して大乘を説く』 しかし今こそ、そのことを説く時です。私は今、強く決心して、この最高の教えを説くのです」

【(備) 七〇頁 六行】『佛子の心淨(こころきよ)く 柔輒(にゅうなん)に亦(また)利根(りこん)にして 無量の諸佛の所(みもと)にして 深妙(じんみょう)の道(どう)を行ずるあり』 「仏の教えを聞く人たちの中には、『心が清く、教えに対して素直で正直な人』がいます。私はその人のために、これから最高の教えを説くのです。私はその人たちが、未来に於いて必ず仏になるということを保証しましょう。このような人たちは、常に心の奥深くで仏を念じている人ですから、未来で『成仏する』ということを知れば、言い知れぬ大歡喜を心から覚える人たちです。その人が、たとえ声聞であれ、縁覚であれ、そして菩薩であっても、 / 『皆(みな)成佛せんこと疑(うたが)いなし~唯(ただ)一乘の法のみあり 二なく亦(また)三なし』 必ず『仏に成る』ことには疑いがありません。『真実の教え』というものは

ただ一つしかないのです。2番目の教えや3番目の教えというものは無く、すべては『**仏の智慧**』を説くために説かれたものです。なぜならば、／『**諸佛世に出(い)でたもうには 唯(ただ)此の一(こと)事のみ實(じつ)なり**』 仏がこの世に出て来た理由は、すべての人を『**仏の智慧**』にまで導こうというただ一つの目的であって、／『**終(ついに)に小乗を以て 衆生を濟度(さいど)したまわず**』 小乗の教えによって衆生を救われるのは、最終的な救いではありません」

【(偈)七二頁 四行] 『**佛は自(みづか)ら大乘に住したまえり ~ 此れを以て衆生を度したもう**』 「仏は一切衆生を救い、みんなを『**仏の境地**』に導こうと、あの手この手を用いて手を尽くします。仏は最高の教えを悟っているのですから、／『**若し小乗を以て化(け)すること ~ 我則(すなわ)ち慳貪(けんどん)に墮(だ)せん**』 人々に小乗の教えしか説かないという**法惜(ほうお)しみ**はしません。／『**諸法の中の悪を斷(だん)じたまえり**』 法惜しみは**悪**であり、そのような**悪**は仏の中にはありません。仏は人を導くときに報いを求めたり、人が仏になるのを妬(ねた)むような気持ちなどは一切ありません。／『**光明世間を照す 無量の衆に尊まれて 爲に實相の印を説く**』 仏は世界に光明を与え、無数の人々のために『**諸法実相**』を説くのです」

【悟りを得た仏が、『大誓願』を立てる。】一

【(偈)七二頁 終三行] 「舍利弗よ。次のことをよく知っておきなさい。じつは仏が悟りを得た時、仏は大きな誓いを立てたのでした。／『**一切の衆をして 我が如く等しくして異(こと)なることなからしめんと欲(ほ)しき**』 それは『**一切の人間を、私と違わない、同じ仏の悟りに導く**』と言う**大誓願**です。その大誓願を今ここで、最高の教えを説くことによって果すことが出来ました。しかし尊い最高の教えをそのまま説いてしまうと・・・、／『**無智の者は錯亂(しゃくらん)し 迷惑して教(おし)えを受けず**』 無智の人は頭が混乱し、思い違いをしたり、戸惑ってしまい教えを正しく受け入れることが出来なくなる恐れがあり、／『**我知んぬ此の衆生は 未だ曾(かつ)て善本を修せず 堅く五欲に著(じゃく)して 癡愛(ちあい)の故に惱(なや)みを生ず**』 無智の者がなぜそうになってしまうのかという理由を、私は理解しています。それはなぜかと言いますと、この教えを正しく受け取れない人は、**そもそもが、『善行を行うことが出来ず』** 五官の欲望に執着してしまいます。そのために様々な悩みを引き起こしてしまうのです。／『**諸欲の因縁を以て 三惡道に墜(つた)し 六趣の中に輪廻して 備(つぶ)さに諸(もろ)もろの苦毒を受く**』 様々な欲望や執着の心でいると、『**六道**』を輪廻して地獄道や餓鬼道、畜生道に陥(おち)り、死に変わり生き変わり六道をグルグル回るばかりで、結局はさまざまな『**苦**』を受けることになってしまうのです」

【人は六道輪廻し、再び生まれ変わって母の身に“いのち”を宿す】一

【(偈)七三頁 四行] 『**受胎の微形(みぎょう) 世世に常に増長(ぞうちょう)し 薄徳(はくとく)少福の人として 衆苦(しゅく)に逼迫(ひつぱく)せらる**』 「人間は生まれ変わる時、今言ったように**善行を行なわず、『最高の教え』を素直に受け入れることが出来ない人は、前世の悪い業を背負ったまま再び母の胎内に入っていくこと**になります。そして**生まれ変わるたびに自らの『悪業』を積み重ねて行くようになり、結果的に『徳が少なく、幸せの薄い人』として生きること**になります。そして再び生まれ変わっても、結局は様々な苦しみに身をやつし、いつまでも苦しみの人生を送ることになるのです」

【**仏は人々の根性欲（こんじょうよく）を知り、機根に合わせて種々の法を説く**】—

【(偈) 七三頁 五行】『**邪見(じゃけん)の稠林(ちゅうりん) 若(も)しは有(う) 若しは無等(むとう) に入(い)り**』 「世の中には数多くの正しくない思想がはびこっています。その誤った思想の中に入ってしまうと、迷い込むと出て来れない深い密林に入るような状態になります。今でも（釈尊在世当時のインドでは）、民衆を真に救うことができない空理空論の誤った哲学・思想が62派もあります。その哲学・思想を持つ人たちは、自分の思想や自説こそが最も正しいと信じ込んでいるため、その誤った哲学・思想を捨てることができません。自分の考えこそが正しいと『**慢心**』しています。ですから仏がそばにいても、 / 『**亦(また) 正法を聞かず 是(かく)の如き人は度し難し**』 正しい法を聞くことができず、未来永劫、仏を見る事が出来ません。こうした人々は誠に救いがたいのです」

【(偈) 七三頁 終四行】「舍利弗よ。私はそうした人々を救うために『**方便**』を用いて、まずは手はじめに『**人生苦を救う法**』を説き、『**現象の変化から超越し、解放される**』ところに『**心の平安**』があると説きました。 / 『**我涅槃を説くと雖(いへど)も 是(こ)れ亦(また) 眞の滅に非(あら)ず**』 しかし、この『**現象の変化**』から解放されることが、『**眞の悟りの境地・涅槃**』ではありません。 / 『**諸法は本(もと)より來(このかた) 常に自(おのずか)ら寂滅(じゃくめつ)の相なり**』 この宇宙の全ては、その本質において、そもそもすべては平等であり、大きく調和しているものなのであります。本当の仏の子である修行者たちは、『**眞の悟り**』、『**諸法実相**』を悟り、そして修行を完成させることで / 『**來世に作佛(きぶつ) することを得ん**』 来世において必ず『**仏に成る**』ことが出来るようになるのです」

【(偈) 七三頁 終行】「私は『**方便力**』を用いて、ただ一つの『**眞実の法・眞理**』を、三つに説き分けてきました。じつは、全ての仏は私と同様に三つに教えを説き分けても、最終的には『**眞実の法・眞理**』を説くのです。皆さん。今こそ『**疑う心**』を捨てて教えを聞かなければなりません。諸仏の説く言葉には違いなどありません。全て同じです。諸仏が説く『**眞実の法・眞理**』はただ一つであり、**二つはないのです**。過去からの無数の仏は様々な『**方便力**』を用いて、ただ一つの『**眞実の法・眞理**』を説いてきました。そして、それによって無数の人々を仏道へ導き入れてきました。 / 『**深心(じんしん)の所欲を知(しる) しめして 更に異(い)の方便を以て**』 それができたのは、諸仏は人々の心の奥にある全ての欲望を知り尽くしているためで、だからこそ、相手の性質・欲望・機根を知り分けて、適切に『**方便**』を用いることが出来るのでした」

【『**万善成仏**』(あらゆることが成仏につながる)】—

【(偈) 七四頁 終五行】「ある人々は過去において仏に出会って仏の教えを聞き、 / 『**若(も)しは法を聞いて布施し 或いは持戒・忍辱(にんじゆく) 種種(しゅじゆ)に福德を修せし**』 ①『**六波羅蜜**』の行を實踐しました。それによって、仏道を成就する(仏に成る)ことが出来ました。また仏の入滅後 / 『**若し人善軟(じゆんなん)の心ありし**』 ある人々は ②常に自分の人格の向上を志し、素直で柔軟(じゆんなん)な心になることで、仏道を成就することが出来ました」

【(偈) 七四頁 終三行】同様に仏の入滅後、ある人々は仏舎利を供養するために / 『**舎利を供養する者 萬億種の塔を起(た)てて**』 ③**仏塔を建立(にんりゆう)し**、金銀、宝をもって供養しました。 / 『**乃至(な)い 童子(どうじ)の戯(たわむれ)に沙(すな)を聚(あつ)めて佛塔と爲(せ)る**』 また、子どもたちが遊び半分で砂を集めて仏塔を作ったりしても、それが大きな契機となってその人たちは仏道に入り、ついには仏と成ることが出来たのでした」

【(偈) 七五頁 四行】 『若(も)し人佛の爲の故に 諸(もろもろ)の形像(ぎょうざう)を建立し 刻彫(こくちやう)して衆相(しゆせう)を成せる』 「また、ある人々は仏を慕(した)う心から仏像を造って仏の三十二相の徳相を完成させ、貴金属や木、粘土や漆喰(しゅくい)などで ④ 仏像を造りました。 / 『綵畫(さいえ)して佛像の百福莊嚴(しやうごん)の相を作(な)すこと』 あるいは ⑤ 仏の徳を絵に表現しました。 / 『乃至(ない)童子(どうじ)の戲(たわむれ)に 若(も)しは艸木(そうもく)及び筆 或いは指の爪甲(つめ)を以て 畫(えが)いて佛像を作(な)せる』 また子どもたちが遊びで草や木の枝、指の爪などで地面に仏の姿を描(か)きました、そのことがきっかけとなって、その人たちは仏道に入り、段々と徳行を重ねて、ついには仏と成ることが出来ました。そして、菩薩たちを教化して、無数の大衆を救ったのであります」

【(偈) 七五頁 終行】 『若し人塔廟(とうみやう) 寶像(ほうざう) 及び畫像(えざう)に於て 華(け)・香・梅蓋(ぼんがい)を以て 敬心(きやうしん)にして供養し』 「もしある人が ⑥ 仏塔や仏像、仏画に花や香を供え、旗を立てるなどして様々な供養したとしましょう。あるいは音楽を奏し、讃歌を歌ったとしましょう。たとえそれが小声で歌ったとしても、そのことが契機となってその人は仏道に入り、功德を積んで、ついには仏と成ることが出来るのであります」

【(偈) 七六頁 四行】 『若し人散亂(さんらん)の心に 乃至(ない)一華(いちげ)を以て 畫像(えざう)に供養せし』 「もしある人が何かに気を取られて、落ち着かない心で仏像や仏画に、たった一輪の花を供えたとしましょう。また、 ⑦ 仏像を丁寧に礼拝した人はもちろんですが、 / 『乃至(ない)一手(いっしゅ)を擧(あ)げ 或いは復(また)少し頭(こゝべ)を低(た)れて 此れを以て像に供養せし』 片手だけで拝み、ほんの少し頭を下げるという省略した簡単な礼拝であったとしても、その人はそれが契機となって仏道に入り、精進を重ね、ついには仏道を成就し、ひろく無数の人々を救うことになります」

【(偈) 七六頁 終四行】 『若し人散亂(さんらん)の心に 塔廟(とうみやう)の中に入(い)って 一(ひとたび)南無佛と稱(しょう)せし』 「ましてや仏塔や仏廟(ぶつびやう)で、他の物事に気を取られて落ち着かない心で、 ⑧ たった一声『南無仏』と称(とな)えたとしても、それが契機となってその人は仏道に入り、ついには仏と成ることが出来るのです」 —【万善成仏】—

【一人として成仏しない者はいない

／仏の願いはただ一つ。すべての人が成仏すること】—

【(偈) 七六頁 終三行】 「遠い、遠い過去からこれまで、仏の在世や滅度の時において教えを聞いた者は、皆すでに仏道を成就する(仏に成る)ことが出来ました。これから未来に於いても無数の仏が現われますが、それらの仏も多くの人々を救い、仏の智慧を得るために導いてくれます」

【(偈) 七七頁 二行】 『若(も)し法を聞くことあらん者は 一(ひとり)りとして成佛せずということなけん』 「もし仏の教えを聞くことができれば、一人として成仏しない者はいません。 / 『諸佛の本誓願は 我が所行(しょぎやう)の佛道を 普く衆生をして 亦(また)同じく此の道を得せしめんと欲す』 仏の本当の願いとは、私がたどって来た『仏への道』を、全ての人と同じように歩み、達成することです」

【(偈) 七七頁 四行】 「これから未来に現われる無数の仏も、様々な教えを説きますが、そのすべての教えも、ただ一つの『真実の法・真理』を説くためです。 / 『佛種(ぶつしゅ)は縁に従(よ)って起ると知(し)るしめす』 一人ひとりが具えている仏の種(仏性)は、触れる縁によって芽生え、花を咲かせます。仏はこのことを知っていますから、すべての人を仏の悟りへと導くと言うただ一つ目的のために、この『一乗の教え』すなわち『真実の法・真理』を説くのです。 / 『是(こ)の法は法

位(に)に住して 世間の相(そ)常住なり』「仏は眞実の世界・眞如に住していますから、仏の教えは永遠不滅の教えなのです。この教えのごとくにこの世は成り立っており、したがってこの教えに基づいて行動する限り、千変万化する諸現象にとらわれず、すべてが『調和』していることが理解できるようになります。 仏は『眞理』を悟っていますので、様々な『方便』を用いて人々を教化し、その結果、多くの人を正しく導いていくのです」

【(偽)七七頁 終五行】「この世には、天上界から人間界の人々から供養・讃歎される仏がいます。それらの仏は人々を安穩へと導くため、様々な方便を用いて法を説きます。じつは私もそれらの仏と同様に / (『我も亦是(またか)の如し 衆生を安穩ならしめんが故に 種種(しゅじゆ)の法門を以て 佛道を宣示(せんじ)す』) すべての人を『安穩で円満な境地』に導くために、様々な教えを用いて仏道を示すのです。そしてあらゆる人々の性質・欲望・機根を知り分けて適切に法を説きますから、すべての人たちを歡びに満たして導くことが出来るのです」

【五欲に執着する衆生の様子】—

【(偽)七八頁 四行】「舍利弗よ、よくお聞きなさい。私が仏の眼をもって六道にさまよう衆生を見ると、 / (『貧窮(びんぐ)にして 福慧(ふくゑ)なし』) 『心が貧しく・福德に欠け・本能のままに生きているために、智慧がない』状態です。 / (『生死(しょうじ)の險道(けんどう)に入(い)って 相續(そうぞく)して苦斷(くたん)えず』) そのために、次々に襲ってくる『変化』に堪えられず、険しい人生の悪路を歩み、次から次へと苦しみか絶えることなく続くのです。五欲に執着する衆生は / (『犍牛(けんご)の尾を愛するが如し』) まるで犍牛(けんご)が、自分の尾を大事にしている様子と同じように見えます。 犍牛(けんご)は自分の尾を丁寧に毛づくろうために尾が美しくなり、人はその美しい尾を手に入れるために犍牛(けんご)を殺します。犍牛(けんご)というものは、わざわざ殺されるために自分にとって大した役にも立たぬ尾に執着し、大事に毛づくろっているのですから、誠に愚かというほかありません。人も犍牛(けんご)と同じです。必要以上の欲望を持ち、執着するために、『眞実の姿』が見えず、自ら不幸を招いているのです。 / (『是(こ)の衆生の爲(ゆゑ)に 而(しか)も大悲心(だいひしん)を起(おこ)しき』) 私はこのような衆生を見て、その苦しみから救ってあげたいと心から思っているのです」

【悟りを得た時に誓った仏の『大誓願』】—

【(偽)七八頁 終四行】「私はブツタガヤーの菩提樹下で悟りを得ました。そして21日間、その悟りの内容を自身の中でかみ締め、振り返りました。その時、私が思ったことは、私が悟ったこの『眞理』は最高の教えであるために、とうてい言葉に尽くして表現することが出来ず、 / (『衆生の諸根(しよこん)鈍(どん)にして、樂(らく)に著(ちやく)し痴(ち)に盲(めい)いられたり』) 人々は機根が低く、快樂に執着し、ものごとを正しくみることができないために、決して理解できるものではないと考えました。だから人々に説くことは辞めようと思いました。しかし諸々の梵天、神々が降臨し、この『眞理』を説くように請(こ)われたのです。私は大変悩みましたが、過去世の仏が『方便力』を用いて法を説いたことに考え及び、私はついに重大な決意しました。それは『自分が悟った『眞理』を、かつての仏がなされたように、 / (『我が今得(い)る所の道も 亦(また)三乗と説くべし』) 『眞理』を三つに説き分けることにしよう』と決心したのであります」

【(偽) 七九頁 六行] 「私がそう決意した時、十方世界から諸仏が身を現わし、次の言葉を述べてねぎらってくれました。『善いかな。釈迦牟尼仏。あなたは最高の教えを体得し、それを私たち諸仏と同様に《方便力》を用いて説き示すことを決意してくれました。あなたが決意したことと同様に、私たちはこれまで最高第一の教えを三通りに分けて説き、人々の機根に応じて法を説いてきましたが、それは全て、人に仏の智慧を伝え、／『但(ただ)菩薩を教(おし)えんが爲なりと』《菩薩を教化せんがためであったのです』と、十方世界の諸仏が私の決意を讃え、私のこれからの努力に対してねぎらいの言葉をくれたのであります」

【(偽) 七九頁 終二行] 「舍利弗よ。私は諸仏のその言葉を聞いて、心を定めました。／『我濁惡世(じよくあくせ)に出(い)でたり 諸佛の所説の如く 我も亦(また)隨順(ずいじゆん)して行ぜんと』『自分がこの乱れた世に生まれ出(い)でたのは、この惡世を救うためである。だから私も諸仏が言われる通り、《方便力》を用いて衆生を救おう』。そう決意したのでした。そして私は、波羅奈(はらない/「鹿野苑・ろくやおん/バナラス)に赴(おもむ)き、かつて苦行を共にした五比丘に対して初めて法を説いたのでした。これを『初轉法輪』と言います。これによって五比丘たちは阿羅漢(あらかん)の境地を得ることが出来ました。じつはこの『初轉法輪』という事実は、教えを説く私である『仏』、説いた教え『法』、そしてその教えを聞き、実践する仲間たち『僧』という『仏・法・僧』、すなわち『三宝』が整った瞬間であったといえます。私はその後、／『生死(しやうじ)の苦永く盡(つ)くすと』人々が人生のあらゆる『変化』から生じる『苦』を消滅する法を、長い期間にわたって説いてきたのでした」

【方便を用いて『真理』を説く決意】一

【(偽) 八〇頁 六行] 「舍利弗よ。よく聞くのです。私には数多くの仏弟子がおり、それらの者たちは皆、／『曾(かつ)て諸佛に従いたてまつりて 方便所説の法を聞けり』 過去世において多くの仏に仕え、『方便』をもって説かれた教えを聞いて来た人々です。その者たちを見て私は心から思いました。／『如來出(い)でたる所以(ゆえん)は 佛慧(ぶつゑ)を説かんが爲の故なり 今正しく是(これ)其(そ)の時なり』『私は仏の智慧を説くためにこの世に生まれ出(い)でたのであるから、教えを説かなければならない、今こそ、その時です。』と」

【(偽) 八〇頁 終三行] 『舍利弗當(な)に知るべし 鈍根(どんこん)小智(しょうち)の人 著相(じゃくそう)憍慢(きやうまん)の者は 是(こ)の法を信ずること能(あた)わず』「舍利弗よ。機根が低く、自分が正しいと自惚(うぬほ)れている増上慢(そうじやうまん)の者は、この教えを正しく理解することは出来ないでしょう。／『今我(いまわれ)喜んで畏(おそ)れなし』しかし私にはもはや、ためらいや畏れはありません。／『正直に方便を捨てて 但(ただ)無上道を説く』私は『方便』の教えではなく、仏の悟りである無上道の教え・真理をそのまま説くことにしたのでした。／『菩薩是(こ)の法を聞いて 疑網(ぎもう)皆已(みなす)に除(ぞ)く』これによって菩薩たちはすべての疑念を晴らすことが出来、今ここにいる1200人の阿羅漢(あらかん)たちは、必ず仏の悟りを得ることができるようになるでしょう」

【(偽) 八一頁 一行] 『三世諸佛の説法の儀式の如く』 『過去・現在・未来の三世の諸仏が法を説かれた方法(三世諸仏、説法の儀式)のように、私も初めは『方便』の教えを説き、その後、機が熟するのを見て『真実の教え・真理』を説くのです。仏が世に出るということは、誠に稀(まれ)なことです。そしてたとえ世に出て来ても、この最高の教えを説くということは、さらに稀なことです。ですから無限の長い年月の間で、この最高の教えを聞くことは、本当に有り得ない貴重なこと

です。ですから教えを聞いて『歡喜』を覚える人は、三世の全ての仏を供養する尊い人だと言え、それはまさに三千年に一度、花を咲かせる『優曇華(うどんげ)』に出会うことにも勝(まさ)る稀有(けう)の人だと申せます」

【『一乗真實』を説く決意。《但(ただ)菩薩を教化したもう》を重ねて強調】—

【(偽)八頁八行]「皆さん。ゆめゆめ疑いなど持ってはなりません。私は全ての教えを知り尽くしている『教えの王』です。その私が宣言します。／(『但(ただ)一乗の道を以て 諸(もろもろ)の菩薩を教化して 聲聞(しょうもん)の弟子なし』) 『これから《一乗の教え》を説いて、菩薩だけを教化します。私にはもはや声聞の弟子などはいません』。舍利弗よ。すべての声聞よ。菩薩たちよ。／(『是(こ)の妙法は 諸佛の秘要(ひよう)なり』) この甚深微妙の教えは、仏が一番大事にしている教えであり、めったに説かれる教えではありません。五濁の悪世では、人々は欲に溺れ、執着の心でいっぱいであるため、人々は仏の道を求めることはしません。ですからこれから先の智慧を持たない人々は、／(『迷惑して信受(しんじゅ)せず 法を破(は)して悪道に墮(た)せん』) 『真理の教え』を聞いても、理解できないばかりか、むしろ教えに反抗的になり、最悪の不幸に陥(おち)って行くでしょう。／(『慚愧(ざんき)清淨(しょうじょう)にして 佛道を志求(しり)する者あらば 當(ま)きには是(か)の如き等の爲に 廣(ひろ)く一乗の道を讚(ほ)むべし』) しかし、そういう人のなかで自分の至らなさに気付き、徐々に素直な心になって仏道を求めようとする人がいたならば、その人のためにこの『一乗の道』を教えを褒(ほ)め讃(ほ)めて、教えを勧めなさい」

【法を實踐しない者は、教えの真意を完全に理解できず、

人生の日の出を見ることできない】—

【(偽)八二頁二行]「舍利弗よ。よくお聞きなさい。／(『諸佛の法是(か)の如く 萬億の方便を以て 宜(よろ)しきに隨(したが)って法を説きたもう』) 諸仏は無数の『方便』を用いて、その人に相應(ふさわ)しく教えを説くものです。／(『其(そ)の習学(しゅうがく)せざる者は 此れを曉了(きょうりょう)すること能(あた)わじ』) ですから、**仏の教えを学び、實踐しない人は、仏の教えの真意を完全に理解できず、その人の人生は 闇夜のままで、日の出を見ることが出来ません。**／(『復(また)諸(もろもろ)の疑惑なく 心に大歡喜を生じて 自(みづか)ら當(ま)きに作佛(さぶつ)すべしと知れ』) どうか疑惑を持たず、真理を知る喜びを感じ、将来、必ず仏に成ることを信じてください。**心に大歡喜を起こし、『必ず仏に成れるのだ』**と言うことを、しっかりと受け止めましょう」と世尊は説かれたのでした。



『諸佛如來は但菩薩を教化したもう。～ 餘乘の若しは二、若しは三あることなし』

(六七頁 二行)

ただ菩薩を教化したもう

(P362・3行/P275・6行)

菩薩だけを教化して、ほかのものはかまわないというのではなく、—— 人によって早い遅い

のちがいはあっても、とにかく菩薩道という一つのルートをすべての人にしらせるのが、仏の教化であるぞ—— という宣言なのです

かいさんけんいつ 開三顯一

(P357・1行/P271・終2行)

大切な所です。いわゆる〈開三顯一(かいさんけんいつ/三乗を開いて一乗を顯(あらわ)わす)〉の宣言です。前にも度々のべましたように、仏の願いというものは、全ての人を仏の境地へ導きたいという一事につきますのです。～ ところが、仏の目から見れば、究極においては声聞・縁覚・菩薩というような違いはないのです。—— 声聞も、縁覚も、自分では気がつかないでいるけれども、じつは仏の境地へ達する道を歩んでいるのであって、今はその途中の段階にいるというだけのことなのだ—— ということを見通しておられるからです。

あるのはただ一仏乗 いちぶつじょう

(P363・終行/P276・8行)

一仏乗というのは、結局「全ての教えが一切衆生を仏の境地へ導くための教えである」ということです。—— 二つや三つの教えがあるように見えるのは、仏の方便によってそれぞれの段階の人にふさわしい教えを説いたまでのことであって、仏の真実の教えというのはあくまでも一つしかないのだ—— というのです。これが〈一仏乗〉の意義であります。

『諸の衆生に種種の欲・深心の所著あることを知って、其の本性に随って、種種の因縁・譬喩・言辭・方便力を以ての故に、而も爲に法を説く。舍利弗、此の如きは皆一佛乗の一切種智を得せしめんが爲の故なり』 (六八頁 七行)

『一佛乗の爲の故なり』 (六七頁 (四行)・七行・終二行/六八頁 三行・(終三行) /七〇頁 一行)

ごじよくあくせ 五濁の悪世

(P372・3行/P284・4行)

『諸佛は五濁の悪世に出でたもう』 (六八頁 終二)

仏がこの世に出られて教えを説かれるのは、よくよくの時であります。世の中に汚れが満ち満ちて、どうにもならない時に、それを救うために仏は出現されるのです。その世の汚れ・濁りというものの原因やありさまを分析してみると、大体五つにわかれるというので『五濁の悪世・ごじよくのあくせ』といいます。

《劫濁・こうじよく》— 時代が長く、古くなったためにおこってくる悪。マンネリ化している状態。

こういう時こそ仏の教えによって「人間の生きることの意味・使命」をもう一度見直さなければならぬ。

《煩惱濁・ぼんのうじよく》— 煩惱・我儘がますますさかんになるために起こる濁り。

《衆生濁・しゅじょうじよく》— 一人ひとりの立場、性質が違ふところから出る世の濁り。「譲る精神」が少なくなり、全体の調和を害する「我「立場」を一方向的に通す」。

《見濁・けんじよく》— ものの見方がそれぞれ違ふために起こる世の乱れ。邪見(じゃけん・狭い自己本位の見方)が横行して正見を蔽(おお)ってしまい、世が濁る。

《命濁・みょうじよく》— 人の寿命が短くなるためにおこる世の濁り。目の前の利益や目先の効果、すぐ効果のあらわれるようなことばかりを追いかける考えをする。

《^{しゆい}愚惟のひととき ①》

『五濁の悪世』。私たちの日常で、①《劫濁・ごじよく》⇒『マナー化』。②《煩惱濁・ぼんのうじよく》⇒『煩惱がさかん』。③《衆生濁・しゅじょうじよく》⇒『譲る心がなく我を一方向的に通す』。④《見濁・けんじよく》⇒『自己本位の見方を強引に通す』。⑤《命濁・みょうじよく》⇒『目先の利益だけを求める』ということがあるのか？ ないのか？ — 振り返ってみましょう。

さんじょうかいえ 三乗開会

(P380・2行/P289・終5行)

一つの正法に達する道を、それぞれの機根に依じて三つに分けて説き(開・かい)、そうしてだんだんに一つの道へ導いてゆき、最後に全部一カ所に合わせること(会・え)を「三乗開会・さんじょうかいえ」と言います。(声聞⇒四諦、縁覚⇒十二因縁、菩薩⇒六波羅蜜)

『諸佛如來の但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非ず』(六九頁 三行)

仏の教えというものは〈すべての人を仏の境地にまで導く〉というのがただ一つの目的なので、現在自分が達している境地で満足して、人を教化したり、人を救ったりする仕事へ入ろうとしない人は、本当の仏弟子だとはいえないのです。(P382・7行/P291・7行)

『便ち復阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし、此の輩は皆是れ増上慢の人なり』(六九頁 六行)

菩薩行によって仏の智慧の完成を求めない修行者は仏道修行者とはいえない— と言い切っておられるその厳しさに、身の引き締まるのを覚えます。(P386・終2行/P295・1行)

『佛の滅度の後、現前に佛なからんをば除く』(六九頁 終四行)

今こうして法華經を受持し、学ぶことができるのは、現前に仏がおられるのと同じだと思わなければなりません。～ 我々はあくまでも釈尊の教えられた最高の道を目指して進まなければ、仏弟子とは言えないのです。(P387・4行/P295・5行)

《^{しゆい}愚惟のひととき ②》

「現在自分が達している境地で満足して、人を教化したり、人を救ったりする仕事へ入ろうとしない人は、本当の仏弟子だとはいえないのです」と開祖は説きます。

— では、「そこそこ私は幸せだから、特別に精進する必要はない」、「私は現在の状況（境地）で十分満足だから、これ以上精進を深める必要はない」。または「もう私は救われることはないから、これから精進をしたところで無駄だ」「どうせ救われないのだから、これからの精進はあきらめよう」など、そんなことを考えてしまう自分がいるのか？ いないのか？ 振り返ってみましょう。

『^{かい}戒に於て^{おい}歛漏有^{けつろあ}って ^そ其の^{けし}瑕疵を^{まも}護り^{おし}惜む』 (七〇頁 四行)

(五千起去した人) この人たちは〈^{おそ}怖勝^{じゆん}順劣^{じゆん}戒・^{ふしやう}ふしよう^{じゆん}じゆん^{れつかい}れつかい〉において欠けているのだと解釈されています。すなわち〈^{かち}勝(すぐ)れた^たるを^{おそ}怖(おそれ)、^{おろ}劣るに^{じゆん}順(したがう)〉で、ひじょうに優れた教えに対しては、とても難しくて手に届きそうもないと恐れをなし、それよりも低い教えに対しては、これぐらいならちょうど手ごろだと考えてもそれに順(したが)うという、消極的な、妥協的な、卑怯な精神です。～

最初から七十点ぐらいを最終目標とするような、肝っ玉の小さな人は、自分の欠点を知ってはいても、それを思い切って切り捨ててしまうような果敢さがありません。～ すなわち自分の欠点を知っていながら、それと妥協してしまう消極的な精神です。これも凡夫の特徴であって、そのような人は本当の救いに達することは出来ません。大成することもできません。 (P390・1行/P297・9行)

『^{いま}未だ^{かつ}曾て^{なんだち}汝等 ^{まさ}當に^{じゆう}佛道を^う成^とずることを^い得べしと^い説かず ^{いま}未だ^{かつ}曾て^{ゆえん}説かざる^{せつじ}所以は^い説時^い未だ

『^{いた}至らざるが^{ゆえ}故なり ^{いま}今^{まさ}正しく^こ是れ^そ其の時なり ^{けつじゆう}決定して^と大乘を^と説く』 (七一頁 三行)

大事な一節です。みんな仏になれる！…この大宣言を、この《法華經》において、初めて発表されるのです。～ 《法華經》が《授記經》だといわれる所以(ゆえん)はここにあり、また大乘中の大乘である所以(ゆえん)もここにあるのです。 (P404・7行/P308・5行)

にじようきぶつ 二乗作仏

(P411・終4行/P313・終2行)

『^{しやうもんも}聲聞若しは^{しよせつ}菩薩 我が^{ないし}所説の^{いちげ}法を^{おい}聞くこと ^{みなじゆうぶつ}乃至一偈に於てもせば ^い皆^い成佛せんこと疑なし ^い十方^い佛土の中^いには^い唯一^い乗の^い法のみあり』 (七一頁 終二行)

この《方便品》は、一言でいえば「だれでも仏になれる」という教えであって、特に声聞・縁覚も仏になれることを、ここで初めて宣言されたものです。それゆえ『二乗作仏』の教えとも言われているのです。

『自ら無上道 大乘平等の法を證して 若し小乗を以て化すること 乃至一人に於て

もせば 我則ち慳貪に墮せん』 (七二頁 五行)

〈慳貪・けんどん〉・・・慳(けん)とは、自分のもっているものを、他に与えることを極端に惜しむ心、貪(どん)というのは貪り欲する心です。～ 人を教え導く時は、自分の達している最高の境地まで〈惜しみなく導いてあげる〉という心構えが根本になれば、慳貪の罪をつくることになります。

(P418・1行/P318・終3行)

《思惟のひととき ③》

仏は〈慳貪・けんどん〉の心がありません。つまり「《慳・けん》自分の持っているものを他に与えることを極端に惜しむ心」と「《貪・どん》貪る心」を仏は持っていないとあります。

— では、私は、人を教え導く時、「自分の知っていることを惜しげなく、全部教える」または、「自分の達している最高の境地まで〈惜しみなく導いてあげる〉という心構えでいる」ことができていますでしょうか？ 振り返ってみましょう。

『亦貪嫉の意なし 諸法の中の悪を斷じたまえり』 (七二頁 終五行)

悪とは

(P421・6行/P321・1行)

物事の実相を見通せば、悪というものは「実体のないものだ」ということがハッキリします。仏はすべてのものごとの実相を見通している方ですから、もちろん、法惜しみをして衆生に正しい歩みを止めたりする〈悪〉をなさるはずはありません。 「悪」というのは

- ①「修行の歩みをみずから止めること」あるいは、②「逆に後戻りすること」
③「人の正しい歩みを止めさせること」あるいは、④「逆に後戻りさせること」
⇒ ひいては、人に教えを説かない「法惜(ほうお)しみ」が〈悪〉である。

《思惟のひととき ④》

〈悪〉とは「①修行の歩みをみずから止めること / ②逆に後戻りすること / ③人の正しい歩みを止めさせること / ④逆に後戻りさせること」であり、人に教えを説かない「法惜(ほうお)しみ」こそ〈悪〉であると開祖は説きます。— 開祖のこの教えを、あなたはどのように受け止めますか？ 考えてみましょう。

《思惟のひととき ⑤》

仏は『亦(また)貪嫉(とんじつ)の意(こころ)なし』/人を導いてあげて何らかの報いを求める気持ち(報應や感謝を求め、名声をあげる気持ち)『貪(とん)』と、人が自分と同じように上達したり、または自分以上に飛び越えていくことを妬(ねた)む気持ち『嫉(じつ)』、が無いとあります。果して私の心はどうであるか？ 振り返ってみましょう。

りんねせつ いぎ 輪廻説の意義

(P428・終2行/P326・終7行)

〈生有/しょうう〉・〈本有/ほんぬ〉・〈死有/しう〉 ⇒ 〈中有/ちゅうう〉 ⇒ 〈生有〉・〈本有〉・〈死有〉 ⇒ 〈中有〉 ⇒ 〈生有〉・〈本有〉・〈死有〉 ……

りんねせつ 輪廻説の正しい受け取り方

(P440・終2行/P334・9行)

この輪廻説を、まちがって受け取ると非常に消極的なものになってしまうことです。〈私が現在苦しんでいるのは、過去の業があまりに悪いからで、今、何をしてもダメなのだ。あきらめるしかないのだ〉よいうふうに、この世における努力を一切放棄してしまう生き方です。さらに悪いのは、輪廻説で他人を裁いてしまうことです。〈お前が、現在そういった苦しい目にあうのは過去世になしたお前の業のせいなのだから、あきらめて、現在の生活に甘んじていろ〉などという発言や、発想は、仏教徒として、否、仏教徒であるかないかということより、人間として、してはならないことなのです。

ばんぜんじょうぶつ 万善成仏

(P467・終6行/P355・終7行)

成仏の縁となる「八つの行い」

- ① 六波羅蜜を行ずる。
- ② 仏の滅後にも善軟（ぜんなん・常に向上を志し、真理に対して素直で柔らかな心）を持つ。
- ③ 仏滅後、仏塔を建て供養し、または子どもがたわむれで砂の仏塔を作る。
- ④ 仏像を彫刻し、鑄造を作る。
- ⑤ 仏像を描く。または子どもがたわむれで仏の形を描く。
- ⑥ 仏像や仏塔に供物を捧げ、音楽・仏讃歌を歌う。
- ⑦ 仏を礼拝する。略式の礼拝、片手拝みをする。
- ⑧ ただ一声、「南無仏」と唱える。

しゃくそん だいせいがん 釈尊の大誓願

『我本誓願を立てて一切の衆をして我が如く等しくして異ることなからしめんと欲しき』 (七二頁 終三行)

『諸佛の本誓願は我が所行の佛道を普く衆生をして亦同じく此の道を得せしめんと欲す』 (七七頁 三行)

ひとりとして成仏しない人はいない

(P470・5行/P358・1行)

『若し法を聞くことあらん者は ^{ひと} 一りとして成佛せずということなけん』(七七頁 二行)

これこそ、仏がこの世に出現された大目的を端的に言い表した尊いお言葉なのです。～ なんという有難いお言葉でしょうか。～ この《法華經》が《授記經》といわれる最大の所以(ゆえん)が、このお言葉なのです。～ そして、自分は必ず仏の境地に到達できるのだと確信できるのです。～ この法華經を学び、一つでも実践していくうちに、必ずそういう大歡喜を心から感得できるようになります。それがこの法華經の大功德なのです。

《思惟のひととき ⑥》

釈尊が「人々を私と同じく仏にするために出現したのだ」という大誓願や、法華經を聞けば「一人として成仏しない人はいない」という釈尊のお言葉を聞いて—— あなたは何を感ずるか？ またこれからの精進で、私は何を心がければ良いか？ 何をすれば良いか？ (どういふ精進をすることが大切か？) を考えてみましょう。

『佛種は縁に従って起ると知しめす』(七七頁六行) (P475・4行/P361・終7行)

「成仏するということは、『縁起』によるものであって、何か特別な存在が成仏したり、他を成仏させたりするものではない」という意味です。つまり、成仏するのもしないも(救われるのも、救われないも)自分の精進次第なのだということです。

『六道の衆生を見るに～ 犍牛の尾を愛するが如し』(七八頁五行)

《思惟のひととき ⑦》

六道をさまよう衆生は、『犍牛(みょうご)の尾を愛するが如し』だと、「自分のために何の役に立たないものに心が奪われ、それに執着しているために、結果的に自分を不幸にしている」と釈尊は説かれています。—— この經文を噛み締めてみましょう。

『如來出でたる所以は 佛慧を説かんが爲の故なり 今正しく是れ其の時なり』(八〇頁 終五行)

『其の 習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』(八二頁 四行)

《思惟のひととき ⑧》

『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』の經文を、どのように受け止めますか？ 噛み締めてみましょう。

…これで《方便品第二》のお説法は終わりになります。 (P523・終2行/P398・3行)

舍利弗をはじめとして、いならぶ声聞・縁覚その他の在家修行者たちが、「**あなたたちは全て菩薩であり、すべて仏になることのできる身である**」と、初めて仏さまのお口から聞かされ、どれほどの歓喜に浸(ひた)ったかは、想像に余りがあります。

なかでも、舍利弗の喜びはいかばかりであったでしょう。その喜びがあらわれ出て、心から仏さまにお礼を申し上げたことから、つぎの《譬諭品第三》の説法がはじまります。

《^{しゆい}思惟のふいかえり まとめ

今日の『方便品第二(後半)』の学びを通して、何を学び取ったか？

(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以上